通り雨 二人肩寄す一つ傘
汗に噴き出る 金の目の夜

令和六年七月二十日

大中臣正比呂

コンサートの帰りに、友が教えてくれた「金の目」という店に行った。鍋料理は夏バテ防止だから、貴女の選択は、もっともである。四人前を平らげて外に出たら、夜空はもう耐えきれずに雨を降らす。あわてて目に留まった黒喫茶店に逃げ込んだのだが、汗で夏バテになりそうである。アイスコーヒーで汗を収めようとするのだが、店員さんは、「もう閉店の時刻です」と無慈悲にも勘定書きをテーブルに置く。嗚呼。